

日本神話の星と宇宙観（1）

勝 俣 隆

〈長崎大学教育学部 〒852 長崎市文教町1-14〉

従来、日本人は古来から星に関心が薄く、日本神話にも、星の記述はほとんど見られないとされてきた。しかし、古事記や日本書紀の神話を詳しく分析してみると、星や星座の記述と思われる描写が、少なからず見出される。これは、古代日本人も星に深い関心を持ち、他の民族同様に、星の神話を生み出して来たにも係わらず、今まで、その事実が見過ごされてきたことを意味しているのではなかろうか。本稿では、日本神話の星と宇宙観について、文献に基づき具体的に述べてみたい。

1. 古代日本人の宇宙観

古代日本人は、どのような宇宙観を持っていたのであろうか。勿論、宇宙観と言っても単純ではなく、様々な要素が複合し、複数の観念が混在していた可能性が推測される。しかしながら、上代の文献から、宇宙観と思われる記述を抜き出して考察してみると、各種文献に共通して存在していたと思われる宇宙観が浮かび上がってくる。それは、古代日本人が有した、一般的な宇宙観である可能性がある。なお、本稿で、上代や古代という用語を使う場合は、七・八世紀の飛鳥・奈良時代を一応念頭においている。神話自体は、さらに古い伝承を伝えている可能性もあるが、古事記が西暦の712年、日本書紀が720年に成立しており、風土記・万葉集・祝詞なども、その前後の伝承や歌を集めて、八世紀ごろに成立したことがほぼ明らかにされているからである。そこで、以下、具体的な文献に従って、実際の星空(幸いなことに、歳差による若干の移動を除けば、我々は古代日本人が仰いだのと、ほぼ同じ星空を眺めることが出来る)と比較して、古代日本人の一般的な宇宙観を推定してみたい。それは、次のような宇宙観である¹⁾。

右、託賀(たか)と名づくる所以(ゆゑ)は、昔、大人(おほひと)ありて、常に勾(かがま)り行きき。南の海より北の海に到

り、東より巡り行きし時、此の土(くに)に到來りて、云ひしく、「他土(あだしど)は卑(ひく)ければ、常に勾り伏して行きき。此の土は高ければ、申(の)びて行く。高きかも。」といひき。故(かれ)、託賀の郡(こほり)といふ。其の踏みし迹処(あところ)は、数多(あまた)、沼と成れり。

これは、播磨国風土記託賀郡(はりまのくにふどきたかのこおり)の記述で、足跡が沼となるような大人(巨人)は、いつも天に背がつかえて、かがまり伏して歩いていたが、播磨国(現兵庫県)の四方をさまよった挙げ句に託賀郡にやって来たところ、託賀郡は天が高く背を伸ばすことができたので、それを喜んで、その土地を、(天が)高いことにちなみ「託賀(たか)」と名付けたという話である。この東西南北の天が低く、中央の託賀郡の天が高いという描写から、天をドーム状の半球と見なしていたことが帰納されよう。また、他の土地では、天が低く、巨人の背が天につかえるので、かがんでいたという記述は、天が空虚な存在ではなく、確固とした物質で層状を成していることと観念されたことを推測させよう。(注1)

同様に、延喜式祝詞(えんぎしきのり)の祈年祭(としごひのまつり)には、次のような記事が見られる。

皇神(すめがみ)の見鬘(みはる)かし坐(ま)す四方(よも)の国は、天(あめ)

の壁（かき）立つ極み、……青海原は棹舵（さをかぢ）干さず舟の鱸（へ）の至り留まる極み、大海に舟満ちつつけて、陸（くが）より往（ゆ）く道は荷の緒（を）縛（ゆ）ひ堅めて、……馬の爪の至り留まる限り、長道（ながぢ）間（ひま）なく立ち続けて、……

ここでは、四方を見渡せば、その涯に「天の壁」が立ち、舟の舳先も、海の涯で「天の壁」に突き当たり、舟がそれ以上先へ進めなくなっており、馬も陸地の涯で「天の壁」に遮られて、それ以上上蹄（ひづめ）が進めない状態になっていることが描かれている。これは、古事記序文にも、同様の一文があり、海の涯、地の涯に、それぞれ「天の壁」が立ちただけで、船も馬も、それ以上進めないのだという観念が、当時一般的なものであったことが知られる。即ち、この「天の壁」が、海や陸の涯に屹立しているという観念は、確固とした物質でできたドーム状の宇宙観という見方を支持するものであろう。

このように、海や陸の涯に「天の壁」が聳えているならば、海や陸は、その涯で天に繋がっているという観念を当然呼び起こすであろう。万葉集に見られる次の表現が、まさに天海、あるいは天地の接合の観念を端的に示している。

……葦原（あしはら）の 瑞穂（みづほ）の国を 天地の 寄合（よりあ）ひの極（きはみ） 知らしめす神の命（みこと）と……（巻2, 167）

これは、草壁皇子（くさかべのみこ）の死を悼む柿本朝臣人麿（かきのもとのおそみひとまろ）の歌で「天地の 寄合の極」即ち「天地の接するその果てまで」支配されるはずであった皇子が天逝してしまったのを惜しんでいる部分である。

これがさらに進むと、天地の接合点から、天上世界へ行けるという展開になる。万葉集の次の歌は、石田王が卒（みまか）った時に、丹生王（にふのおほきみ）が作った歌である。

……天地に 悔しき事の 世間の 悔しきことは 天雲（あまくも）の 遠隔（そくへ）の 極（きはみ） 天地（あめつち）の 至れるまでに 杖策（つゑつき）きも 衝（つ）かずも行きて…… 天にある 佐佐羅（ささら）の 小野の 七ふ菅（すげ） 手に取り持ちて ひさかたの 天の川原に 出で立ちて 潔身（みそぎ）てましを 高山の 巖（いはを）の上に 座（いま）せつるかも（巻3, 420）

これは「天地（あめつち）の 至れるまでに」即ち、天と地が「至れる（一つに繋がる）」その涯まで、「杖策きも 衝かずも行きて（杖を突くにしろ、突かぬにしろ、何とかして行って）」という意味で、亡くなった石田王を蘇生させるために、丹生王が天地の接合点に行きたいと思った場面である。天地の接合点まで行った後はどうなるかというと、「天にある 佐佐羅（ささら）の小野の 七ふ菅（すげ） 手に取り持ちて」とあるので、月世界へ行くことになる。「佐佐羅（ささら）」とは、万葉集巻6・983番歌の左注に、「月の別（また）の名をささらえをとこといふ」とあって、月の古名である。月の世界に野原があるとされたのが、「佐佐羅（ささら）の小野」である。「七ふ菅（すげ）」というのは、七つ節のある菅で、蘇生のための呪具の一つである。月は新月から上弦の月を経て満月になり、また下弦の月を経て新月となり、さらに再び満月へ向かって膨らんで行くので、古今東西で、不死や復活の象徴とされた²⁾。この不死の世界である月世界に生えた七ふ菅を「手に取り持」つことで、蘇生の儀式が行われるのである。さらに、その後、「ひさかたの 天の川原に 出で立ちて 潔身（みそぎ）てましを」とあるように、天の川（銀河）に出て「潔身（みそぎ）」をしようとする。「潔身（みそぎ）」は、やはり、自他の復活蘇生のために水の生命力を使って行う呪術である。つまり、この万葉歌では、丹生王は、石田王を蘇生させるために、天地の涯まで行き、そこか

ら天に昇り、月世界の野に生える七ふ菅を取り、さらに天の川に出て、蘇生のための潔身をしようとしたことになる。実際には、天の涯に行くことはできずに、その結果、石田王を蘇生させる事は出来ず、「高山の巖の上に」葬ってしまったことが、非常に「悔しき事」だというのである。

これは、地の涯から天に昇る話であるが、一方海の涯から天に昇る話もある。丹後国風土記逸文浦島子（うらのしまこ）の条がそれである。

島子、独り小舟に乗りて海中に汎（うか）び出でて釣するに、……乃ち五色の亀を得たり。……忽（たちま）ち婦人となりぬ。……女娘（をとめ）答へけらく、「天の仙の家の人なり。……君、棹（さ）を廻して蓬山（とこよのくに）に赴（ゆ）かさね。」……女娘、教へて目を眠らしめき。即ち不意の間に海中の博く大きな島に至りき。……一つの大きな宅の門に到りき。女娘、「君、且（しま）し此処（ここ）に立ちませ」と曰ひて、門を開きて内に入りき。即ち七たりの豎子（わらは）来て、相語りて「是は亀比売（かめひめ）の夫なり」と曰ひき。亦、八たりの豎子（わらは）来て、語りて「是は亀比売の夫なり」と曰ひき。茲（ここ）に、女娘が名の亀比売なることを知りき。乃ち女娘出で来ければ、島子、豎子等が事を語るに、女娘の曰けらく、「其の七たりの豎子は昴星（すばる）なり。其の八たりの豎子は畢星（あめふり）なり。君、な恠（あやし）みそ」と曰ひて、即ち前立ちて引導き、内に進み入りき。

この浦島伝説では、浦島子は、「小舟に乗り」「天の仙の家」であり、「海中の博く大きな島」でもある「蓬山」に赴くが、そこには、「七たりの豎子」たる「昴星」と「八たりの豎子」たる「畢星」が現われる。これは、既に論じたように、一つには、浦島子が、海の涯に行くことで、同時に、天の涯まで赴いたことを表わし、また一つには、海中の

島である蓬山が、天上と繋がった世界であったことを示していよう³⁾。

古代中国の文献では、『列子』湯問篇（とうもんへん）に、次のような記述が見られる。

渤海の東、幾億万里か知らず、大壑（たいがく）有り、……天漢の流れ、之（これ）に注がざる莫（な）し。……其の中に五山有り、……五に曰はく蓬萊（ほうらい）……

「天漢」乃ち銀河の流れが「注」ぐ「大壑」（大きな谷）に「五山」が有り、その一つが「蓬萊」であるという。「蓬萊」は、丹後国風土記の「蓬山」と同一のものであり、結局、蓬萊に銀河の流れが注いでいることは、銀河と蓬萊が繋がっていること、乃ち、「蓬萊（蓬山）」と銀河、並びに銀河の所属する天上世界が繋がっていることに他ならない。さらに、晋の張華の『博物誌』には、次のようにある。

旧説に云はく、天河海と通ずと。海渚（かいしょ）に居る者、……槎（いかだ）に乗りて去く。……昼夜去（ゆ）くこと十余日、つひに一処に至る。……牛を牽（ひ）く人、乃ち驚きて問ひて曰はく、「何の由（ゆゑ）か、此（ここ）に至る」と。此人、……「此は何処か」と。答えて曰はく、「君、還りて蜀郡（しょくぐん）に至り、嚴君平（げんくんぺい）を訪れよ」……後（のち）蜀に至り君平に問ふ。曰はく、「某年月日、客星有り、牽牛宿を犯す。年月を計るに、正に是れ此人、天河に到る時也。」

ここでは、「天河海と通ず」（銀河は海と繋がっている）と明示されている。また「海渚に居る者」が「槎に乗」って「昼夜去くこと十余日」「つひに一処に至る」が、そこは「牛を牽く人」がいる天上世界であり、後に嚴君平によって、「客星＝彗星（此人）」が「牽牛星（牛を牽く人）」の位置に出現したことが明らかにされる。これは、海の涯が天及び天河と繋がっており、海の涯から、天の河を通して、天上へ行けるとされたことを明瞭に示し

ていよう。

このように、日本でも中国でも、陸地の涯や海の涯は、天と繋がっており、その繋ぎ目たる地平線や水平線の果てから、天のドーム状の壁を伝わって、あるいは、天のドームの一部である天の河を逆上って、天上世界へ行けるという観念が存在したことは、以上の文献から疑いえないところであろう。また、それは、天が確固とした壁状の層で出来ており、全体としてはドーム状を成していると考えられていることを意味していよう。(注2)

以上のように、天上世界へ行くには、天地の涯、天海の涯から、天へ昇るのだという観念が存在した。それは人間が天上世界へ行こうと思ったら、空を飛べないのだから、天と接していると考えられた地の涯や海の涯まで、馬や徒歩、船等で何とかして行って、そこから天に昇るしかないのだと考えたためであろう。そして、それは、丹生王の歌のように、実際には、ほとんど不可能なこととされている。

この天地接合の観念を図示すれば、次の図1のようになろう。

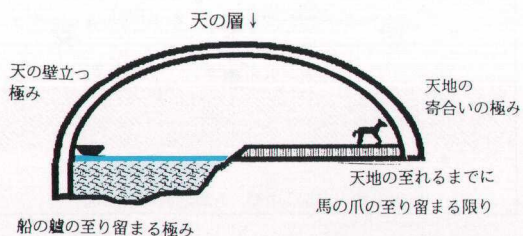


図1

一方、天の神が地上へ行く場合は、如何であろうか。古事記に見られる次の場面が注目される。

鳴女(なきめ)、天より降り到りて、天若日子(あめのわかひこ)の門なる湯津楓(ゆつかつら)の上に居て、委曲(まつぶさ)に天つ神の詔(の)りたまひし命(みこと)の如言ひき。爾(ここ)に天佐具壳(あめのさぐめ)、此の鳥の言ふことを聞きて、天若日子に語りて言ひしく、「此の鳥は、其の

鳴く音(こゑ)甚(いと)悪(あ)し。故(かれ)射殺すべし。」と云ひ進むる即ち、天若日子、天つ神の賜へりし天之波士弓(あめのはじゆみ)、天之加久矢(あめのかくや)を持ちて、其の雉(きぎし)を射殺しき。爾に其の矢、雉の胸より通りて、逆に射上げられて、天安河(あめのやすのかは)の河原に坐す天照大御神(あまてらすおほみかみ)、高木神(たかきのかみ)の御所に速(いた)りき。……是に高木神、……其の矢を取りて、其の矢の穴より衝き返し下したまへば、天若日子が朝床に寝し高胸坂(たかむなさか)に中(あた)りて死にき。

この古事記の記述で、高木神は、天若日子が鳴女という名の雉(きぎし=キジの古名)を射た矢が天上世界に届いたのを取って、「其の矢の穴」から衝き下している。「其の矢の穴」とは、文脈から判断して、矢が天の層に開けた穴と推測される。即ち、上述の如く、天は確固とした物質で造られ、層を成していたから、そこを強い力で射られた矢が通り抜ければ、その通り抜けた跡が穴として残るような構造をしていると帰納されるのである。

つまり、天と地は、天の層によって、二つの世界に分離されているが、天の層に開けられた穴によって、矢が天地の間を往復したように、天地の間の穴は、天地間の通路になっているということが出来るのである。それ故、神が天から地へ行く場合は、この天の穴を通して下ることになろう。

この点に関して、ウノ・ハルヴァ『シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像』では、興味深い指摘がなされている。関連部分を要約すると次のようになる⁴⁾。

アルタイ系諸民族の世界観では、天は、天幕の屋根状に大地を覆うもの、あるいは大鍋を伏せたような半球状をした堅固な蓋と観念された。星は、その天幕や半球状の蓋に開いた穴であって、そこから、天上界、神々の世界の光が差し込んでいると考え

た。その考えにおいては、流れ星は、天の神々が、天の扉を少し開いて地上の様子を眺める時に流れる光として説明される。流れ星に願い事をすれば叶うというのは、流れ星が流れている時は天の神様が地上を眺めている時だから、直接に願い事を聞いてもらえるからだという。また、星々の中でも、昴は寒気が流れ込んでくる空気穴、北極星は、神々が天地を出入りする通路として観念されている。

アルタイ系諸民族は、民族の系統上、日本民族と近縁にあると考えられる民族であり、神話においても、日本神話の世界観と極めて近い観念が、そこに見いだされても不思議はない。それ故、日本神話においても、天の層に開いた穴を星と見なしていた可能性は十分に指摘されるのである。

その証拠の一つが、星の古語としての「つつ(筒)」という言葉の存在である。例えば、万葉集の中に「夕星(ゆふつつ)の か行きかく行き」(巻2, 196)、「夕星の 夕になれば」(巻5, 904)のように、「夕星(ゆふつつ)」という表現が見られるが、これは金星(宵の明星)を指す古語である。平安時代の古辞書である倭名類聚抄(わみょうるいじゅうしょう)には、宵の明星の中国名「長庚(ちょうこう)」に「由布都々(ゆふつつ)」, 同じく類聚名義抄(るいじゅうみょうぎしょう)にも「ユフツ」 という和名が見える。つまり、「夕星(ゆふつつ)」は、「夕べの星」の意味で「つつ」は星の古名なのである。「星」の古名としての「つつ」は、住吉三神の記述にも出てくる。古事記の伊邪那伎神(いざなぎのかみ)の禊祓(みそぎはらえ)の記事の中には、次のような描写がある。

伊邪那岐大神、竺紫(つくし)の日向の橘の小門の阿波岐原(あはきはら)に到り坐(ま)して、禊(みそ)ぎ祓(はら)ひたまひき。……次に水の底に滌(すす)ぐ時に、成れる神の名は、……底筒之男命(そこつつのをのみこと)。中に滌ぐ時に、成れ

る神の名は、……中筒之男命(なかつつのをのみこと)、水の上に滌ぐ時に、成れる神の名は、……上筒之男命(うはつつのをのみこと)……その底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三柱の神は、墨江(すみのえ)の三前(みまへ)の大神なり。

この「墨江の三前の大神」とは、大阪の住吉大社の三柱の祭神であり、航海の神とされる。この「底筒之男命・中筒之男命・上筒之男命の三柱の神」は、オリオン座の三星に当たるのでないかということが古くから言われて来た⁵⁾。オリオン座の三星は、海水面に対し、垂直に等間隔で昇って来るのであり、その並び方は、三星が海中にあることを想像すれば、底筒・中筒・上筒と呼ばれるのに相応しい。また、上筒之男命の位置には、天の赤道が来ており、三星は、真東から昇り、真西へ沈むことになる。(図2を参照のこと)。

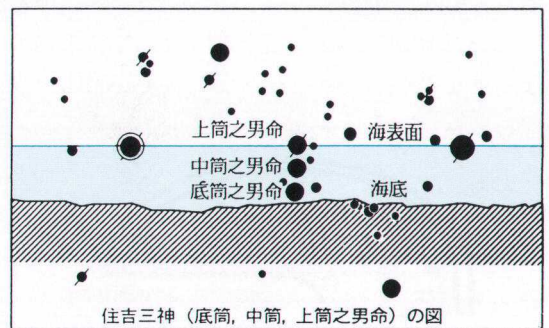


図2

さらに、オリオン座の三星は、安永四年(1775)の俳人且水の『佐渡日記』でも、「三ツ連たる星にあてゝやらんには、磯輪かならずはぐるべからず。」とあって、「三ツ連たる星」即ち「オリオン座の三星」を目当てとして、船を進めれば、方位を誤らないということが明記されている。つまり、オリオン座の三星が航海の指標とされていたのであれば、その三星が、航海神として神格化されるのも素直に納得されるところであろう。

このように、底筒・中筒・上筒の三星が、オリオン座の三星の神格化であれば、その場合も、「筒(つつ)」は、星を表わす古名であることになる。それでは、何故、「つつ(筒)」が、星の古名となるのか。これは、文字通り、「筒=細長い中空の円い穴」のためでないだろうか。上述した通り、天と地は、天の層によって、ドーム状に区切られていた。その層に開けられた穴が星であれば、その穴の形状としては、「筒」状の形が最も相応しいであろう。実際、古星図では、星は円い形で表示されることが多いのである。一定の厚さを持った天の層に開けられた穴は、細長い中空の穴で、その最も自然な形が円柱状、即ち「筒」であろう。一方、星(ほし)の語源であるが、「ほし」の「ほ」は、炎(ほのほ=火の穂)・螢(ほたる=火垂る)の「ほ」と同様に、「火」を表わす「ほ」から来ている可能性が高いであろう。昔は、松明(たいまつ)にしる灯明(とうみょう)にしる、照明の光は、火の光によったので、夜光っているものは、火が燃える光であると思なされたのであろう。「し」の方は、種々言われているが、よくわからない。いずれにしても、星(ほし)は、光に重点が置かれた呼称であり、「筒」という天の層に開いた穴から漏れる光を、「星(ほし)」と呼んだのかも知れない。以上の考察から言えることは、古代日本人は天が確固な物質で造られた一つの層を成し、全体としてドーム状の形態で大地を覆い、天の層の上の天上世界と天の層の下方の地上世界は、その天の層で分離されているという宇宙観を持っていたということである。天地の交流は、その天の層に開いた穴である筒(つつ)即ち星を通して行われるか、あるいは、地の涯、海の涯が天と繋がっているという観念から、地の涯、海の涯まで、何らかの手段を使って行き、そこから天の壁や天の河を昇ることにより、初めて可能になると考えられていたことになろう。

参 考 文 献

- 1) 古事記・日本書紀・風土記・万葉集・祝詞等の引用は、日本古典文学大系本に拠る。但し、字体は、旧字体を新字体に直した。
- 2) ネフスキー N., (岡 正雄編), 1971, 月と不死(平凡社)・石田英一郎, 1956, 桃太郎の母(法政大学出版局)など。
- 3) 勝俣 隆, 1985, 「浦島伝説の一要素 一丹後国風土記逸文を中心に」, 国語国文 606, 19~32
- 4) ハルヴァ U. (田中克彦訳), 1971, シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像(三省堂)
- 5) 西村真二, 野尻抱影, 倉野憲司氏等の諸著作が古い。

(注1) これは、天空を眺めると、頭上の天は高く、地(水)平線上の空は低く、全体としてドーム状に見えるという生理的・心理的事実に基づくものであろう。

(注2) なお、ドーム状の天空観の一証拠としては、「空(そら)」の語源が「反(そ)るの名詞形「反(そ)ら」(反っているもの)に由来すること(大言海等)が挙げられよう。

Stars and Cosmology in Japanese Mythology

Takashi KATSUMATA

Nagasaki University, Nagasaki

Abstract: For long time, it was believed that Japanese since ancient times were not so interested in stars. But the examinations of ancient texts have revealed that there were some descriptions of stars and constellations in Japanese mythology. This shows that Japanese also had interest in stars and created the mythology of constellations like other peoples. In this paper, I will explain and analyze about the cosmology in ancient Japanese myths.